

## 新型コロナめぐる分断と格差、政治と科学を振り返る…アンソニー・ファウチ博士インタビュー

2023/05/20 読売新聞

米国のトランプ、バイデン両政権で新型コロナウイルス対策の指揮を執ったアンソニー・ファウチ博士（82）が、読売新聞のインタビューに応じた。ファウチ氏は「国が一丸となって対応しなければならない感染症だったが、分断が進んでいた米国ではできなかった」と振り返った。（ワシントン 富山優介）



10日、オンラインでのインタビューに応じるアンソニー・ファウチ博士

### パンデミック、完全終息ではない

ファウチ氏は米国立アレルギー感染症研究所長を1984年から務めてきた感染症のスペシャリストだ。昨年12月に同所長や首席医療顧問の公職を退任した。米国でコロナの感染が拡大してからは連日の記者会見でウイルスの性質や対策の必要性をわかりやすく伝え、「米国で最も著名な科学者」と言われた。

ファウチ博士とのインタビューは10日、オンラインで行われた。主なやり取りは以下の通り。

——世界保健機関（WHO）は5日、新型コロナに関する「国際的な公衆衛生上の緊急事態」を解除した。米国も11日に「公衆衛生上の緊急事態」を終了する。妥当な判断か。

「まず、パンデミック（感染症の世界的な流行）は完全に終息していないということを指摘したい。米国ではまだ1日当たり、約150人の死者が出ている。とても許容できる数字ではない。だが、1～2年前と比較すると米国や世界の状況はかなりよくなっている。緊急事態の必要性はなくなったと言える。一方で、この3年間で様々な変異株が発生したように、新たな変異株によって再び感染者が急増する可能性はあり、備えが必要だ」

——米国ではコロナによる死者が110万人を超えている。なぜここまでの惨状になったのか。

「米国には50州があり、統一的な対策を取れず、非常に分裂していた。ワクチン接種やマスク着用を推奨する州もあれば、しない州もあった。また、医療の格差が大きく、必要な診療を受けられない社会的弱者の入院や死亡が多かった。安全で効果的なワクチンを記

録的な速さで開発できたが、十分に生かせなかった。ウイルスの変異に関する情報を米国内で即時に共有する仕組みも欠けていた。米国は豊かな国だが、公衆衛生の面で大きな弱点がある。

### 「予測できない事態」想定せよ

——コロナのパンデミックはどんな教訓を残したか。

「多くの教訓があった。何が起きるかを事前に予測することはできない。パンデミックに対処するには、『予測できない事態』を想定しないとイケない。例えば、当初は既存の呼吸器感染症と同じような流行をずっと考えていたが、変異株が次々と出現したり、無症状の人からも感染したりするなど、驚きの連続だった。そして、重大な感染症には国が丸となって対応しなければならないということだ。米国でのバラバラな対応は、反省点だ」

——日本のコロナ対策をどう評価するか。

「経済力が同程度の他の先進国と比較すると、日本はよくやっていると思う。公衆衛生当局の勧告に従う国民の割合が多く、この点は米国と比べてとても優れていた。比較的、死者数を低く抑えることができた。日本の対応を高く評価したい」

——過去の感染症の流行と異なり、SNSを通じてコロナに関する誤情報や偽情報が拡散した。

「この3年間で最も懸念を抱いていた問題だ。公衆衛生上の危機に際して、誤情報や偽情報は無駄に命を失わせる危険性がある。唯一の解決策は、報道機関が正しい情報を発信し、人々が科学的根拠とデータに基づく情報を理解できるようにすることだ。誤情報や偽情報に対抗する正しい情報を国民に提供するために、私はSNSではなく報道機関を頼りにしている」

### データ・証拠に基づき真実に迫る過程が科学

——トランプ前大統領は科学を軽視する言動が多かった。性急な経済活動の再開に慎重だったファウチ博士に対し、政治家からの攻撃も相次いだ。

「トランプ政権時、自分は科学に基づいて発言したが、反発はすごかった。私を攻撃する人たちは、まるでウイルスが魔法のように消えると言い、深刻な事態を否定していた。もちろん間違いだ。コロナへの効果が証明されていない薬の宣伝も公に行われていた。かなりの量の誤った情報があった。国の最高権力者から発信されたことで、その悪影響は大きかった」

——中傷や脅迫も受けたが、耐えられたのはなぜか。

「医師として、科学者として、そして公衆衛生の担当者として、自分の目標に向かってレーザー光線のように集中することを学んできた。私の使命と目標は、主に米国を、そして間接的には日本も含む世界の人々の健康を守ることだ。中傷や脅迫は不快だが、仕事に集中すれば気を取られることはない。妨げにはならなかった」

——政治と科学の関係はどうあるべきか。

「データと証拠に基づいて真実に迫る過程が科学の本質だ。科学による真実の追究を政治が妨害することがあってはならない。科学的根拠やデータの評価について政治的な影響を受けたり、邪魔されたりすることがなければ、科学と政治は両立することが可能なはずだ」